

「互いに重荷を担いなさい(ガラテヤ 6:2a)」。「自分の荷を担うだけでも大変なのに、とても他者の重荷など引き受けられない」とか、「他人様のをを担うなどおこがましい、それに自分の荷を誰かに担ってもらおうつもりはない」と思うだろうか。

自己責任という心構えは結構なのだが、果たして自分の重荷を自分自身で担えるのか。功利的な世間では「誰かにメイワクをかけない」生き方・死に方が褒められる。しかしそうした矜持が、自分の罪を都合よく割り引いて「軽荷」にしてしまわないだろうか。

「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い(マタイ 11:30)」。「互いの重荷」とはイエスの軛ではないか。「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる(11:29)」。

「軛」によってつながった重荷は、互いに担い合うことで「安らぎ」になる、とイエスは言う。

「テコの原理」がイメージされる。互いの重荷が作用点。そのすぐ傍らでイエスが支点となって天秤棒を肩に担いでいる。やや離れた所に力点としての私がいて、少しの力でその重荷を持ち上げる。

この時もっとも荷重がかかるのは支点で、イエスの痩せた足は震えて地面にめり込み、重さで撓んだ天秤棒がイエスの肩に食い込んでいる。天秤棒はまるで十字架の横木ではないか。

イエスを真ん中にしたこのような配置で、私たちは「互いの重荷を担う(ガラテヤ 6:2)」。ゆえに、重くとも担い合いうる。

「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになる(6:2)」。律法に限らず決まり事は何かとうとうしいが、キリストの律法とはどんなものか。

この言葉遣いに注目したい。律法を「全うすべきである」でも、「全うするか、しないか」でもない。「キリストの律法を全うすることになる」だ。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう(マタイ 11:28)」という言葉通り、イエスの軛は負いやすく荷は軽いから(11:30)、それを「全うすることになる」。

イエスの足を地面にめり込ませて、私たちは「互いの重荷を担う」ことになる。

キリストの律法には、決まり事につきものの「～せねばならぬ」とか「～すべきである」という息苦しい義務はない。担いきれない罪は「テコの支点」であるイエスが負ってくれている。

「ああ、もったいなきこと」と悠長に遠慮してはいられない。私たちはすでに担われているのだから。人間を閉じこめる人間の律法は打ち砕かれ、私は解き放たれて「キリストの律法が全うされる(ガラテヤ 6:2)」。

なぜ、そんな自由がこの私において実現しうるのか。「わたしは、キリストと共に十字架につけられている。生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる(2:19b~20a)」から。

私は、十字架と復活のキリストと分かちがたくあり、キリストを介して兄弟に重荷を担ってもらい、キリストを介して私が姉妹の重荷を担う。この担い合いは、安らぎであり休息(マタイ 11:28~29)。

モーセらもまた重荷を担った。「あなた(モーセ)に授けてある霊の一部を取って、彼らに授ける。そうすれば、彼らは民の重荷をあなたと共に負うことができるようになる(民数 11:17)」。

すでに授けられている霊(マタイ 8:16)の響き合いで世の重荷を負う。理想や善意の力ではなく、「私の霊」が重荷を負う。



《おまけのひとこと》

「兄弟の目にあるおが屑は見えるのに自分の目の丸太に気づかない(マタイ 7:3) 目のおが屑を取るがごとくに兄弟の重荷を担う 私の丸太は兄弟に取り除いてもらう 自らの丸太だと押しつぶされる